

市橋倭研究の意義

— その生涯における異文化体験とアイデンティティ・クライシス —

The Significance of Biographical Study on Yamato Ichihashi

— Intercultural Experience and Identity Crisis in His Life History —

辻 直 人*

要旨

日本人として最初にスタンフォード大学教授に就任した市橋倭の人生は、日米の間で時代に翻弄されたものであった。大学教員着任は、アメリカ西海岸での排日運動を封じる対米啓発運動を推進するためであり、日本政府の代弁者として労した。しかし、1941年12月の真珠湾攻撃以降は日本軍への不信感を募らせた。1942年3月からは日系人強制収容所に収監された。市橋倭の生涯は、一日本人が自己の役割ををどうとらえ、アイデンティティ・クライシスをどう受け止めたかを考える上での興味深い事例である。

キーワード：市橋倭 (Yamato Ichihashi) / 対米啓発運動 (Campaign of Education) / 排日運動 (Japanese Exclusion Movement)

はじめに

いちしやまと
市橋倭とは誰か。

今の時代に彼の名前を記憶している人は、そう多くはないだろう。2014年8月に私はアメリカ・カリフォルニア州のサンノゼやサンフランシスコにある日本人街を訪問した。幾人かの日系人、現地に長く住まれている日本人の方々に市橋のことを尋ねてみたが、驚いたことに、誰も彼のことを知らなかった。同時期に渡米した野口英世や片山潜らと比べても、市橋の名前は広くは日本人社会に浸透していない。一方で彼は「日系人の弁護人」(ユウジ・イチオカ)とまで評されているにも関わらず、である。

市橋倭は日本人で初めてスタンフォード大学の教授になった人物である。1913年に着任し、「日本文明史 (History of Japanese Civilization)」 「現代日本文明 (Modern Japanese Civilization)」 「移民と人種問題 (Immigration and the Race Problem)」 など

の日本関連科目を担当した。所属は歴史学科であり、日本政府の代表としてワシントン軍縮会議 (1921～22年) にも出席した。1941年12月に日米の間で戦争が起きて以降、カリフォルニア州を中心とした地域では日系人を強制収容する隔離政策が実行され、市橋家もその対象となった。1945年4月にスタンフォード大学キャンパス内の自宅に戻ることができたが、後述するように日米開戦とこの強制収容は市橋の心情面で大きな影響を及ぼした。戦後になって1953年に一時帰国するも、8ヶ月半ほど日本に滞在した後は再びアメリカに戻り、一生の大半を過ごした大学キャンパス内の自宅で1963年4月に逝去した。

本稿では、市橋倭の生涯を概観した上で、歴史上どのような役割を果たした人物なのかを考察し、市橋研究の意義について論じてみたい。特に、日本とアメリカの狭間で翻弄された人生をどのように生きたのか、今後の研究の足がかりとして小論をまとめておくことにする。

本研究に関する基本史料としては、スタンフォード大学グリーン図書館 (Green Library) に所蔵されている Yamato Ichihashi Papers と呼ばれる全12箱に及ぶ膨大な個人文書がある。この史料群

* TSUJI, Naoto
北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
教育史、教育学概論

を中心に、周辺史料や以下の先行研究等を用いて考察することにしたい。

1. 先行研究について

市橋を研究した論文や著作はそれほど多くない。その中でも、彼の人生を詳細に明らかにした文献としてゴードン・チャン (Gordon H. Chang) の *Morning Glory, Evening Shadow: Yamato Ichihashi and His Internment Writings, 1942-1945* (Stanford University Press, 1997)がある。この著作は市橋が戦時中の1942年から1945年までの期間、日系人収容所に収監されていた時期の記録を中心に、スタンフォード大学所蔵のYamato Ichihashi Papersや御子息へのインタビューなどを駆使して市橋の人生を明らかにした労作である。伝記としてよく調べてある内容で、近親者でなければ知りえないエピソードからその人となり描かれている場面もあり実に興味深い。文献の構成上は収監時代の記述が中心となっていて、戦時中の日系人強制収容を明らかにする史料として市橋の手記を紹介している傾向が強い。実際Yamato Ichihashi Papersも、全12箱のうち強制収容に関連する史料だけで4箱分所蔵されており、収容時代の記録が中心になっているという特徴がある。チャンの文献は、こうした史料上の性格を受けての内容と言えるだろう。

その他の論文としては、前述したユウジ・イチオカによる論文「被告弁護人—市橋倭と日本人移民 (“Attorney for the Defense”: Yamato Ichihashi and Japanese Immigration)」がある¹。この論文は市橋がスタンフォード大学の就任をめぐっての経緯や、その後市橋の地位や役割をめぐると論議について紹介している。論文タイトルにもあるように、「市橋は日本人移民の弁護を引き受けた」²とその役割を評価している。しかし、果たしてその評価が妥当なのかどうかは、検討を要する。

同志社人文科学研究所『在米日本人社会の黎明期 「福音会沿革史料」を手がかりに』(現代史料出版、1997年)では、「イチハシは、1894(明治27)年に勉学を目的に、サンフランシスコ湾岸地域に渡米した「書生」の一人であった」と紹介した上で(この記述内容に関しては注6を参照)、その後の略歴についても触れた後、市橋の主要著

作 *Japanese in America* (『アメリカにおける日本人』)の内容をめぐって批判的に検討している。

以上見てきたように、市橋を扱った研究そのものがまだ少ないのが現状である。

では、以下の各節では、若い頃からの市橋の人生をたどっていきながら、市橋の言動を分析してその歴史的役割や位置づけについて考察していきたい。

2. 渡米をめぐる動きと渡米直後(1894年以降)

市橋倭は1878(明治11)年4月、名古屋で生まれた。士族階級の出身で、9人兄弟だったという。Yamato Ichihashi Papersに所蔵されている自伝記録によれば、幼少期から病弱だった市橋は医者から気候のいいカリフォルニアで過ごす体調も改善するのではないかと助言を受け、渡米することになったと言う。市橋16歳の時、1894(明治27)年のことだったようである。カリフォルニアの温暖な気候は彼の健康にも好影響を与えたので、日本には帰らずにそのまま同地に留まることにした。渡米初期の記録としては、サンフランシスコの日本人福音会に入会し、同胞共同体との関わりを持っていたことが1896(明治29)年の記録に残っている³。福音会には先に渡米していた兄俊之助も所属していた⁴。更にその後、妹の静子も渡米してスタンフォード大学のあるパロアルト市内の高校(Palo Alto High School)へ1907年に入学、その後スタンフォード大学へ入学して日本人女性として最初の卒業生となった(1916年卒)。このように、市橋兄妹が集まって異国での生活を助け合っていたのだろう。兄妹が複数渡米して勉学に取り組めるというのは、士族の家系としては市橋家は恵まれた環境だったと言える。倭はサンフランシスコ市内のローレル高等学校(Lowell High School)に1899年入学し、1902年に卒業後、翌03年にスタンフォード大学に入学した。

市橋兄妹がアメリカに渡航した1890年代から1900年代(明治30年頃)にかけての時期は、日本国内でもの渡米熱が高まっていた時期で、海外苦学は立身出世の一環と考えられていた⁵。同時期は、外国で学歴を積みながら一旗揚げて故国へ帰ろうと考える人も少なくなく、特にアメリカ西海岸で働きながら学ぶというスタイルの留学が流

行した。当時の言葉でスクールボーイ (school boy) と呼ばれていた。住み込みで家事労働をして空いた時間に学校に通わせてもらうのである。市橋倭の場合、健康上の理由でいわば療養のための渡米だったというのが正確であれば、当時の大多数の渡米者とは異なる動機だったと言える⁶。しかし、その後健康が回復してからもアメリカに留まって勉学を続けたというのは、単なる健康上の問題だけでなく、その時代サンフランシスコを中心に多数の同年代がいたからではないだろうか。ただし、市橋のサンフランシスコでの詳しい生活については、よく分かっていない。また、市橋とキリスト教の関係もよく分かっていない。少なくとも渡米初期の段階で福音会に関わりを持っていたことは確かである。こうした海外苦学生の斡旋や現地での世話をキリスト教界の人たちが多く担ったというのも事実である。

市橋によれば、美山貫一によるアメリカでの成功物語は多くの若者を惹き付けたと言う⁷。美山貫一とは1847 (弘化4) 年生まれ、長州出身で1875 (明治8) 年には渡米して最初期の在サンフランシスコ日本人コミュニティを形成した人物の1人である。1877年に同地で洗礼を受け、日本人福音会の立ち上げにも深く携わった。この美山自身スクールボーイとして苦学した経験を持ち、1885年に帰国後は日本各地でアメリカでの苦学生活を宣伝して回った。

この他にも渡米を促したキリスト教団体として、日本力行会の存在が挙げられる。会を創設した島貫兵太夫は仙台神学校 (現・東北学院) の第一期生 (1886年卒) であり東京の教会で牧師をしていたが、明治中頃の東京下町に目立ち始めた苦学生の支援を始めることとなり、更に苦学生にとっての新境地としてアメリカ渡航を斡旋するため1897 (明治30) 年に日本力行会を立ち上げた⁸。その後、教会を軸にした渡米日本人学生のネットワーク形成が進んでいくことになる⁹。

3. スタンフォード大学着任 (1913年) と

対米啓発運動

筆者は既に市橋のスタンフォード大学着任経緯について、拙著『近代日本海外留学の目的変容』第4章で外交文書を用いて明らかにした。ここで

はその概略を紹介しておく。

日本政府は1913 (大正2) 年、日本人移民に対する排日運動を阻止すべく、様々な広報手段による啓発運動を展開した。この動きを対米啓発運動 (Campaign of Education) と呼ぶ。日本を紹介する講演会や通信社の設置などを展開したが、スタンフォード大学に日本学講座を開講することもその1つであった。同年5月17日にスタンフォード大学ジョーダン学長を沼野総領事代理が訪問した際、「同博士ハ費用ダニ支出ノ途アレハ何時ニテモ同講座ヲ開始シ得ヘキ手筈ナリ」と返事を得ていた。既にこの段階で、市橋が講座担当者として内定していたようである。沼野は牧野外務大臣宛公文書 (同年5月20日付) に「市橋倭ト云ヒ人物往歴等適任ト存ス委細永井総領事ニ付御承知アリタシ」と伝えてきている。

この頃の市橋は、スタンフォード大学大学院を卒業して1910年からはハーバード大学大学院博士課程に進学しており、1908年からは3年ほどアメリカ移民局の嘱託移民調査員になり、カリフォルニア州在住日本人の調査をしていた。この頃の調査を基にして博士論文を完成させ、ハーバードから博士号を取得するのは翌1914年のことであった。この時の博士論文が後に刊行されて、市橋の主著『アメリカにおける日本人』として知られるようになった。その後、財界からの寄附も集まり講座を開く手立てが整ったので、1913年9月から市橋はスタンフォード大学に着任することになったのである。

実はスタンフォード大学には既に「東洋講座」が存在しペイソン・トリート教授が着任していた。しかし市橋の講座は受講生も数十名と良好な成績をおさめているだけでなく、「昨今当地方ノ実情ニ鑑ミルモ対日感情ハ兎角險悪ノ兆候ヲ呈シ此俟ニ放置シ置カバ再ビ昔日ノ状態ヲ再演スルニ至ルハ明白ニシテ此際更ニ各方面ニ対シ大々の啓発運動ヲ試ムルノ必要アル次第ニ有之從テ同大学講座ノ如キモ其運動ノ一部分トシテ之レガ永続ハ極メテ必要ナル次第」との認識を沼野領事は示した。つまり、このスタンフォード大学における一連の日本学講座は日本政府の推進する対米啓発運動の一環として継続開講されるべきと判断したのであった。財界からも更なる寄附を得ることができ

たので、同大学での日本学講座は継続され、市橋もスタンフォード大学歴史学科の教員として職を保ち続けた。また、市橋とトリートは生涯に渡って親交を保つ仲となり、戦時中市橋が日系人収容所に収監されている間も、トリートは市橋の財産を守り、手紙のやりとりなどで連絡を取り合っていた。

しかしこうした国を挙げての対米啓発運動にも関わらず、1920年にはカリフォルニア州議会において「第二次排日土地法」が成立してしまう。これは日本人の借地権を禁じる法律であり、日本人移民の子ども(二世)も土地所有ができなくなった。啓発運動本来の目的であった排日運動の撲滅は達成されなかったと言える。更に1924年には移民法が成立し、移民の年間受け入れ上限の設定とアジア出身者移民の全面的禁止が実施されることとなった。このような時期に市橋がアメリカの大学で政治や歴史の研究をしていたということは、一つの巡り合わせであろう。彼がどのように現地日本領事館に知られるようになったのか、その経緯や背景は分からない。しかし、市橋はその後収容所に収監される1942年までスタンフォード大学で課せられた役割を忠実にこなした。つまり、土地法の成立は阻止できなかったが、市橋は細々と対米啓発運動の一端を担い続けたのである。

当時の記録によれば¹⁰、1915年度に日本人で在米大学の教員スタッフになっていたのは市橋を含めて16名いた。そのうちカリフォルニア大学で日本語講師(instructor)を務めていた久野芳三郎は1920年末に「市橋を日本の利益のスポークスマンであるとして公然と非難した」¹¹。こうした久野の市橋攻撃の真意はよく分からない。久野芳三郎は市橋と同じく愛知県名古屋市出身の同郷者であり、やはり士族であって13歳年上、士族階級においては市橋家は久野家の家臣にあたる¹²。アメリカの大学教員という立場を使って、日本政府の下支えによって「日本人全体を代表してアメリカ人にもものをいう資格がある」¹³ことへの反発だったのかもしれない。しかし、このような批判文が公的刊行物(オークランド・トリビューン紙)に掲載されることによって、市橋の立場に疑義を持つ者も出てきたことは確かである。

1921年1月頃に、スタンフォード日本人学生会によって創刊された雑誌『スタンフォード』、その第1号に市橋俊は寄稿している。「在米日本人学生二望ム」と題された小文であるが、学生たちに日米の架け橋としての役割を期待した内容となっている。この文章については、史料価値を考えて、以下全文を掲載することとする。

在米日本人学生二望ム 市橋俊

歐洲対戦終熄後ノ世界ノ外交舞台ノ花形役者ハ謂フ迄モナク米国ト日本トノ二大強国デアラネバナラス、コノ時ニ当リ日米問題ノ声ノ喧シキヲ聴ク、憂ハ則チ茲ニアリ。然ラバ今後日米問題ハ更ニ紛糾ト錯雜トヲ加ヘ更ニソノ外交交渉ノ一段ト重要ノ度ヲ増スハ火ヲ睹ルヨリモ明ナリ。時ナル哉。コノ難局多事ニ際シ少クトモ在米ノ知識階級ノ代表者トシテ又健全ナル輿論ノ指導者トシテ日米問題ノ円満解決ノ衝ニ当ル者在米学生ノ期待ヲ措イタ他ニ求ムルハ難シ、斯ノ如クンバ在米学生ノ肩ニカハル責務必ズ軽ウシトセズ。

吾人ノ解決スベキ問題ハ二箇アリ、曰ク日米戦争是カ非歟コレナリ。由来日米親善ト提携トヲ措イテ極東ノ平和ヲ談ズルハ痴人夢ヲ説ク者、其ノ愚ヤ及ビ難シ、思フニ両国過去ノ歴史ハ親善平和ノ記録ニシテ将来ノ歴史モ亦コレヲ裏書スル者タラザルベカラズ。

何ノ幸カ吾人ハ親シク米国ノ歴史、文物制度ノ研究ニ没頭シ、就テソノ歴史ニ考證シ兼ネテ世界外交ノ推移ニ着目セバ、彼ノ徒ラニ匆卒トシテ日米戦争ヲ論議スルノ徒輩ハ齋シク^マ維レ近眼短見ノ垂流ノミト言ハザルヲ得ズ、在米学生ハコノ点ニ留意シテ是等軽信無智ノ徒ヲ啓蒙シ、積極的ニハ在米同胞ノ健全ナル思想ト運動トノ中核トナリ日米永遠ノ親善ト平和トニ貢献スルヲ念トセザルベカラズ。

抑モ日本人ハ従来外国研究ニ頗ル冷淡ナル国民ナリキ、人ハ好ンデ欧米ノ文化ヲ口ニソノ国民性ヲ説クモ、結局ソノ言議ヤ多く、皮相ニシテ、識者ガ一顧ノ価値モナイ、日米研究既ニ然リ対支問題モ亦一轍ノミ、批評ト模倣ニ耽ルハ日本人ノ通弊ニシテ真摯ナル研究的態度ノ欠如ハ国民性ノ一大憂患ナリ、コノ点ハ我ガ学生

モ深く警戒ヲ要スル事ナリ、吾人ハ往々在米学生ニシテ何ノ悪意ナク能ク母国ノ政治制度ヲ論難スルヲ耳ニス、母国ヲ憂フルハ愛國ノ士ナルベシ、又現代ヲ批判スルハ学者ノ責務タルベシ、サレドモソノ国ヲ批評スルニハ自ラソノ国ノ歴史ト事実トニ通曉シテ初メテ正鵠的確ノ觀察ヲナシ得ベク、徒ラニ空疎ナル事実ニ立脚シテ、談論風発、快ヲ一時ニ貪ルカ如キハ学生トシテ慎重慎慮スベキ事実ニシテ誤リテ過激ノ思想ヲ懐クノ議リヲ招クコト無キヲ保シ難シ。

学生時代ハ研究ト修養ノ時代ニシテ、決シテ漫リニ批評論難ノ時代ニモ非レバ又好ンデ燕趙悲歌ヲ唱フル時期ニモ非ズ、要ハ在米学生ハ故国学生ト異リタル特種ノ責務アルニ想到孜々トシテ勤メ吃々トシテ励ミ、他日ノ大成ヲ期スルニアリ。

この文章の冒頭で市橋は、第一次世界大戦の終わった世界で、太平洋を挟んだ2つの国、すなわちアメリカと日本は「世界ノ外交舞台ノ花形役者」として登場したと述べている。しかしそのことが却って両国間の問題を「紛糾ト錯雑」へ発展させると共に、両国の関係は一層重要になってくるとも指摘している。だからこそ、「日米問題ノ円満解決」にあたるためには、両国をよく知る在米日本人学生の役割は大きいと論じているのである。この一文からも、1920年代でも既に日米間で戦争の起こる可能性が危惧されていたことが分かる。

また、日本人は「外国研究ニ頗ル冷淡」だと考えており、このような「真摯ナル研究的態度ノ欠如ハ国民性ノ一大憂患」であると嘆いている。だからこそ、「在米学生ハ故国学生ト異リタル特種ノ責務」があると訴えた。

スタンフォード日本人学生会とは、スタンフォード大学に在籍していた日本人学生の団体で、この種の団体はこの時期全米各地の大学を中心に多数形成された。スタンフォード大学日本人学生会がいつ結成されたのかは、はっきりしない。しかし、1916年10月に創刊された隔月刊誌 *The Japanese Student* の巻末に既に団体名が記載されていることから¹⁴、1916年より以前に結成されていたことが分かる。1915年度の段階でスタンフォード大

学に在籍していた日本人学生の数、倭の妹静子を含めて26人だった。大学別に見て、在籍日本人学生数は5番目に多い人数である¹⁵。

4. 1930年代の活動から

1932（昭和7）年10月、一時帰国した市橋は大阪での太平洋問題調査会会合で講演した。講演題は「私の見たアメリカの近況」であり、アメリカ在住者の肌で感じている現地の様子を語っているのだが、その講演の冒頭で、自らの置かれている立場をこう説明している。

結局は私は日本人でありながら、日本に住所を持たない一種異様な人間で（中略）従って私が日本に参りますのは帰国と云う意味ではなくて、私の今やって居ります事業に対して、出来るだけ間違いのないことを学生に伝えたいと思えます為、時々コケおとしに参るのであります。ですから、私が今日のように皆様の前に立ってお話をすると云うのは、頗る地位が転倒して居る訳であります。私の日本へ参りますのは、此度でも以前でも、皆様からお話を承るのが目的でありまして、決して私が皆様にお話をすると云うような考は毛頭ないのであります。（中略）殊に私の専門はアメリカではなくアメリカ人に我国の文化、歴史或は外交関係などを説いて居りますので、私の専門にやって居りますことは、皆様にとって何等の意義もなし、又意義があるべき筈はないのであります¹⁶。

市橋は自らの役割を、アメリカ人に日本の文化、歴史、外交等を教授することであることであるから、日本に戻ってくるのは最新の情報を得るためである、と考えていた。また、自分は日本人ではあるが日本に住むところもなく（妹は先に帰国し東京に住んでいた）、従って日本に来るのは「帰国」ではないとも語っている。つまり、既に彼の居場所はアメリカ・カリフォルニアであって、そこで日本のことをアメリカ人に教え伝えることが自らの使命と悟っていたのだろう。日本人でありながら日本人でない、両国の狭間で生きている揺れ動く心境を垣間見せているのである。しかし一方で、同講演の後半、質疑応答の中では「大和魂

は二世共には消える」ことを説明するために息子と自分の対比をしながら、市橋自身の日本人としての自覚を告白している。

現在私に一人子供があります。私はご覧の通りの人間でありまして、兎に角最近の日本人のように欧米化した人間でありませぬので、封建時代の血が流れて居るのであります。寧ろ私など保守的な日本人かも知れませぬが、自分では日本人らしい日本人だと思っ居ります。こう云う人間でありますから子供も出来るだけそう云う風にやって居るのですが全然駄目です。外国の感化と云うものは恐ろしいもので何をやっても駄目であります。(中略)日本語で話すと子供が逃げてしまいます。私の子供は中学の二年で十三であります、日本語をやれと云うといやがります¹⁷。

このような告白を読むと、心情としては日本人であることを選択していることが分かる。だからこそ、一人息子が自分の思いに反してアメリカに同化していく様子を複雑な気持ちで受け止めているのだろう。

この講演が行われた前年9月18日に満州事変が起きた。この事件を期に、アメリカでの親中国、反日本的な空気が出始めていることを市橋は、指摘している。この時期、太平洋を挟んでアメリカと日本は世界をリードする表舞台に立った「二人のスター」であり、一遍に千両役者が出てきたら「ある程度の衝突は免れ得ない」¹⁸。必要以上の衝突を避けるためにも「宜しく日本の文化を彼等に宣伝するのが一番手っ取り早いことで、又根本的の宣伝ではないか(中略)出来ましたならば奈良の文化史を書きまして、それを始めとしまして私が死ぬまで是からの日本の文化史の為に努力したい」¹⁹と、自分のこれからの務めを語っている。この講演で述べられている市橋の考えは、先に見た『スタンフォード』に寄稿した小文と基本的に同じであり、講演からも、アメリカ人に日本を宣伝する役割に徹しようとしている姿勢が読み取れる。

1937年8月に再度調査と休暇のため日本に帰り同年再び12月にアメリカへ戻った市橋は、1938年1月4日、大学内Memorial Hallにおいて

夜7時半から「戦時における日本の見解(Observation of Japan in Time of War)」という講演を行った。*Stanford Daily*のCampus opinion欄に、1938年1月10日付及び11日付の2日に渡って、この市橋の講演をめぐる読者からの投書が掲載された。時は日中戦争の最中で、同年5月に国家総動員法施行、10月には広東や武漢三鎮を占領、11月に近衛首相による「東亜新秩序」声明と、アジアへの侵略を軸とした戦時政策を展開している時期である。聴衆にとっては、その講演は日本政府のプロパガンダとしか受け取れないような内容だったようだ。

10日付投書によれば、市橋の話聞いて「何人かは憤慨してホールを出て行った。その他の人たちは、彼は理想を語っていると感じるよりも、その話に騙されたと感じた」と言う。会場にいた学生のほとんどは「恥ずべき罪の告白を期待していた」が、市橋は「その代わりに日本の行動に対する防御の姿勢」を展開した。市橋の主張は単に日本の領事から言われた意見を表明しただけだったとも指摘されている。日本政府側の主張を述べたに過ぎない市橋の講演は、プロパガンダ以外の何物でもない聴衆には受け取られたのだった。会場内は険悪な雰囲気になっていたことがこの投書から伺える。聴衆の学生たちは日本の戦時政策に対して強い敵対心を持っており、それに対し、市橋は学生からの非難に対して日本の立場を防御する側に徹していたことが両者の対立を深めた後味の悪いものだった。

11日掲載の投書は市橋のことを「中国と戦う日本の目的と理由を表明しただけで、彼は日本政府の公的代弁者と同じ」と批判している。ユウジ・イチオカが市橋倭のことを「日系人の弁護人」と評したことは、既に紹介した。本稿で紹介してきた市橋の言動から見ると、やはり日本政府の立場を語ることが自らに課せられた役割であると認識していたと考えられる。日系人の弁護に関しても、その基本的立場は日本政府の外交政策(対米啓発運動)に則って表明されたものだった。

5. 日系人強制収容をめぐる動きと市橋

このように、アメリカに普段の拠点は置きつつも日本への心理的一体感を保持していた市橋倭で

あったが、いよいよ1941年12月に起きた日本とアメリカとの戦争は、市橋を窮地へと追いやった。

日本が真珠湾を攻撃しアメリカと攻撃を始めたことに対し、市橋は失望と怒りを覚えた。12月8日の朝、授業のため教室に入ってきた市橋の様子はいつもと異なり、非常に困惑して授業どころではなかったと言う²⁰。1913年にスタンフォード大学教員に着任してから30年近くに渡って、市橋は日米の関係改善という目的のために尽力してきた。それが、逆に日本側から裏切られた形となったのである。このような日本側の攻撃に抗議するため、アメリカの戦時国債を購入して米軍の軍事行動への支持を表明した。

ところが、今度は逆にカリフォルニア州を中心として日系人を隔離する政策が実行され、市橋家もその対象人物とされたのである。日本軍の奇襲を批判しアメリカの軍事行動に賛同しているにも関わらず、日系人という理由で強制的に収容施設に移住させられたのだった。

この日系人隔離政策は、西海岸における日系人への根強い差別や偏見に加え、1941年12月の真珠湾攻撃以降日本軍がアメリカ本土にも攻めてくるのではないかという恐れもあり、また時の大統領フランクリン・D・ルーズベルトは親中反日的立場をとっていたため、「大統領令9606号」によって実施されるようになった。1942年3月より、国防の観点からアメリカ軍の必要に応じ、強制的に外国人（実質日本人）を隔離することが実行され、日系人は強制的にカリフォルニア郊外の収容所に移住させられた。スタンフォード大学キャンパス内にも持ち運び可能な物だけを持っていくようにと移住に関する告知が掲示された²¹。倭63歳、妻けい50歳、パロアルト地域から144名の日系人が強制的に収容されることになった。強制収容所は簡素なバラックに多数の世帯を同居させ、有刺鉄線とフェンスで外部とは完全に隔離された、劣悪な環境であった。収容所は山岳地帯や砂漠など人里離れた寂しい場所に造られた。

市橋家は最初サンタ・アニタ (Santa Anita) の競馬場に作られた仮設住宅に住まわされ、その後カリフォルニア州北部のトゥーリーレイク収容所 (Tule Lake War Relocation Center) へ、更に1943年9月からはコロラド州のアマチ収容所

(Camp Amache, Granada War Relocation Center) へと場所を移して生活を続けた。

トゥーリーレイク収容所は11か所に造られた強制収容所の中でも、最も日本への忠誠心が高い日系人が集められた収容所として知られる。1943年に入ってアメリカの戦時転居当局 (War Relocation Authority, WRA) は日系人に対し、命令を受けたらどの地域でも軍隊の戦闘任務に服するかどうか (質問27)、アメリカ合衆国に忠誠心を誓い、国内外における如何なる攻撃に対しても国を守り、天皇や外国政府への従順を否定するかどうか (質問28)、という質問項目を含んだ「出所許可申請書」に基づいた調査を行い、上記2つの質問に対してどちらもNoと答えた日系人はトゥーリーレイク収容所に送られた。市橋が逆にトゥーリーレイクからアマチに移送されたのは、日系人の間で自らの忠誠心、帰属に対して動揺が広がっている中の出来事だった。ここから、市橋自身のアイデンティティが戦前と大きく変化したことが伺える。また収容所内日系人社会との関わりについても距離を置いた様子が想像される。紙幅の関係で、この点はゴードン・チャンの著書や Yamato Ichihashi Papers 内の史料を更に読み解きながら、別稿にて考察したい。

その後、1945年4月、3年ぶりに市橋倭と妻けいは自宅へ戻った。

まとめ

市橋倭の人生は、正に日米の間で時代に翻弄されたものであった。若き日にアメリカへ渡って留学生として過ごした日々を経て、スタンフォード大学教員に着任した当初は日本政府の外交政策 (対米啓発運動) に加担し、政府の代弁者として労した。それはすなわち排日運動を封じるための役割であり、日本を宣伝し、その立場から日系人の地位を守るための言動を行った。また、政府の代表としてワシントン軍縮会議等の国際会議にも出席した。

スタンフォード大学では教員、研究者として研究教育にも従事した。市橋の立場は常に日本政府と一体であり、時にキャンパス内外から「日本政府の代弁者」であると批判された。日中戦争勃発当初もその姿勢は崩していなかった。しかし、

1941年12月の日本軍による真珠湾攻撃は市橋にとって正に青天の霹靂の出来事で、日米開戦以降は日本軍の取った行動へ反発し、アメリカの戦時国債を購入するなどの行動に出た。

しかし、西海岸在住の日系人という理由で、1942年3月にアメリカ大統領令に従って強制収容所に収監された。収容所での日系人の生活の様子を克明に記録し、貴重な史料として現在もスタンフォード大学に所蔵されている。市橋自身は、最も日本への忠誠心を持った日系人を収容していたトゥーリーレイク収容所から1943年9月にコロラドのアマチ収容所へ移管されている。このことは、彼の日本への気持ちの変化を表している。

Yamato Ichihashi Papersには、戦後の世界情勢をこまめに記録した日記が保管されている。毎日細かな字で社会の動きを洞察しており、各頁には関連した新聞の切り抜きを丁寧に挟んである。戦後の日本をどのような気持ちで眺めていたのだろうか。1954年1月、最後の帰国を果たしてからアメリカに戻る際、「今回は16年ぶりの帰朝であったが、すっかり(日本社会が)変わっていたのに驚いた、朝鮮動乱による特需景気が一時的にも日本国民を浮わつかせ、耐乏生活を忘れさせたのは残念だ」と嘆いている。

市橋俊の生涯は、一人の人間が社会や目の前の出来事にどう向き合ってきたか、アイデンティティ・クライシスをどう受け止めたかを考える上での貴重な事例である。異文化と向き合った生涯において、一日本人が様々な境遇の中で自己のアイデンティティをどうとらえたのか、興味深い場面を多く含んでいる。今後更に史料を活用しながら、市橋の生涯を明らかにしてみたい。

本研究は、科学研究費平成23年度～26年度基盤研究(C)「近代日本における民間を中心とした国際教育交流の拡大に関する調査研究」による調査研究成果の一部である。

<注>

¹ 初出は*Pacific Historical Review*, Vol. 55, No. 2, May 1986, pp.192-225. その後、ユウジ・イチオカの論文集『抑留まで 戦間期の在米日系人』(彩流社、2013年)に再録(原書*Before Internment: Essays in Prewar Japanese American History*, Stanford University Press, 2006)

² イチオカ前掲書、226頁

³ 同志社大学人文科学研究部編『在米日本人社会の黎明期 「福音会沿革史料」を手がかりに』現代史料出版、1997年、293頁

⁴ 同志社前掲書68頁には、「福音会沿革史料」内の「会員消息」の中に、市橋俊と並んで市橋直三郎という名前が列記されている。両者の関係は兄弟なのかどうかは不明である。いずれにせよ、俊が渡米するよりも先に兄がアメリカに来ており、そのつてを頼っての渡米だったことが分かる。

⁵ 1900年頃の海外苦学ブームの実態については、拙著『近代日本海外留学の目的変容 文部省留学生の派遣実態について』東信堂、2010年、第4章を参照。

⁶ 渡米の目的について、阪田安雄は「イチハシは、1894(明治27)年に勉学を目的に、サンフランシスコ湾岸地域に渡米した「書生」の一人であった」と記しているが、この記述内容は健康上の理由で渡米したと書かれているYamato Ichihashi Papers内の自伝的メモとは異なる。阪田安雄『『渡り鳥(birds-of-passage)』とその社会—秘められた過去』、同志社前掲書、17頁。更に、チャンは市橋の渡米に関して別の可能性についても言及している。すなわち、日本の高校を卒業して海軍兵学校への進学を希望していたが健康上の理由で叶わず、渡米したという(Chang, Gordon H., *Morning Glory, Evening Shadow: Yamato Ichihashi and His Internment Writings 1942-1945*, Stanford University Press, 1997, p. 15)。

⁷ Chang, *ibid.*, p. 16

⁸ 島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』警醒社、1911年、125頁

⁹ この内容について本著者は「20世紀初頭における在米日本人留学生ネットワークの形成」という題で、日本教育学会題72回大会(一橋大学)にて研究発表している。その後の調査内容を含めて、このテーマについては別稿において論じる予定である。

¹⁰ *Japanese Students In North America 1915-1916*, Committee on Friendly Relations Among Foreign Students

¹¹ ユウジ・イチオカ『『被告弁護人』—市橋俊と日本人移民』イチオカ前掲書219頁

¹² イチオカ前掲書、原註44～45頁

¹³ イチオカ前掲書、219頁

¹⁴ *The Japanese Student*は全米各地における日本人学生会の連携を強化するため発行された英文雑誌で、1919年5月号まで刊行が続いた。編集室はシカゴ大学エリスホー

ルに設けられ、加藤勝治が編集長を務めた。創刊号巻末に Directory of Japanese Student Associations という当時組織されていた全米各地の日本人学生会の一覧が掲載されている。計21団体あり、その1つに Stanford University Japanese Student Association の名前が記載されているので、組織されたのはそれ以前ということが分かる。

¹⁵ 前述の *Japanese Students In North America 1915-1916* という学生名簿によれば、日本人学生在籍者数の多い大学は南カリフォルニア大学56名、カリフォルニア大学（当時はパークレー校しかなかった）46名、コロンビア大学39名、ワシントン大学33名、スタンフォード大学26名となっている。カリフォルニア州とワシントン州に日本人学生が集中していることがこれらの数値からも分かる。

¹⁶ 市橋倭『私が見たアメリカの近況』太平洋問題調査会、1932年、1～2頁

¹⁷ 市橋前掲書、20頁

¹⁸ 市橋前掲書、12頁

¹⁹ 市橋前掲書、17頁

²⁰ Chang, *ibid.*, p. 97

²¹ Chang, *ibid.*, p. 100

